

デカくて怖い義父の快樂地獄

く処女まんこをぐちゅとろに溶かされ、中出しまで墮とされる話く

サンプル（一部抜粋）

お義父さんに出会ったのは私が15歳の時だから…5年くらい前。

男の人がいないと生きていけないお母さんが、『新しいパパよ』と見知らぬ男の人を連れてくるのは、珍しい事ではなかった。

まあ…私はどの『お義父さん』が来ても深くは関わらなかったけれど。

だって私が新しいお義父さんと仲良くすると、お母さんが嫉妬してヒステリックにキレるから。私が女になる事が嫌なんだと言ってたっけ…。

そのくせお母さんはすぐに浮気して、結局は『お義父さん』が変わる。

それが私にとって当たり前の日常だった。

だけど…そんな日常は5年前に今のお義父さんが来て、少し変わった。

「あかり、この人が新しいお父さんよ。」

いつもと同じようにお母さんが再婚相手を私に紹介したけれど…私は思わず息を飲んでしまっ

た。

だって目の前にいる男性があまりにもデカくて怖かったから。顔は整っているんだけど、温度を感じさせない瞳が怖くて、威圧感がすごかった。

身長は195センチあるらしく：ガタイがよく筋肉質：ワイシャツがパツパツになっていて、見上げるだけで首が痛くなるほどの、圧倒的な大男。すれ違った瞬間、男特有の熱い体温と煙草の匂いに、中学生だった私はそれだけで身体がすくんでしまった。

でも：そんな大男を夫に持つてもなお、お母さんは変わらなかった。

ただお義父さんはずっと冷静で、お母さんの浮気や奔放さに激怒するでもなく、完全にビジネスライクに割り切っているようだった。お母さんが外で男を作って何日も家に帰らなくても、何食わぬ顔で冷ややかにそれを見送っている。二人の間に愛がないのは、子供の私から見ても明らかだった。

（中略）

この日、私は人生で初めての飲み会に参加していた。

バイト先の先輩や店長が新人歓迎会をしてくれるらしく、主役の私の参加は必須だった。

「かんぱーい！」

店長の掛け声で私を取り囲む数人の先輩達とグラスをカチンとぶつける。

「あかりちゃん、主役なんだからどんどん飲まなきゃ！」

先輩達が明るく笑いながら、私にお酒を勧める。

「このお酒、おいしい……！」

「でしょ？甘くて飲みやすいよね。」

「ジュースみたいです。」

談笑しながら、グラスが空になる前に次のカクテルを注文される。

「ほら、あかりちゃん、イッキにいきよう！」

「あ、はい……！」

その場の空気に押され、どんどんお酒を流し込んでいく……。

1時間もすると頭がふわふわして、うまく立てなくなっていた。

「ん……」

「あかりちゃん、大丈夫？」

隣に座る先輩が心配そうに声をかけてくれるけど……先輩の顔がぼやけてよく見えない。

「だいじょうぶ……」

なんとか返事をするものの、もう限界だった。

「ふらふらしてんじゃんw」

隣の先輩が私の肩に手をまわしてくる……。頭が重くて、その先輩の方へと身体が傾いた。

「よし、完全に酔ったみたい。」

先輩の声が遠くで響く。

「っしや、じゃあ俺からいくわW」

「前もお前からだったじゃん！今回は俺からだって。」
意味の分からない会話が聞こえる…。

（中略）

だけどその瞬間

「俺の娘になにしてんだ。」

と低い声が響いた。

お義父…さん…？低くドスの効いた声…。

私の腕を掴んでいた誰かの手が震え、パッと手を離される。その反動でぐらつと後ろに倒れそうになった。

「…俺の娘に何をしているか、聞いてんだよ。」

その言葉とともに倒れそうな身体をぎゅっと支えられた。ゆらぐ事のない大きな手…がつしりとしていて…どこか安心する感覚なのに、危険な男の匂いが鼻をくすぐる。

「お義父…さん…？」

「……」

「な、なにも…その…」

先輩達の慌てる声…震えて怯えているみたい。

「…二度と俺の娘に触るな。」

低い声が響く。その瞬間身体がふわっと浮き上がった。

(中略)

「お、お義父さん！」

「……」

「お母さんには…言わないで…。」

「……」

「その、変な心配かけたくないというか…あの…先輩たちも軽いノリだったというか…私は全然大丈夫だから……」

何の反応もくれないお義父さんに向け、必死で言葉を紡ぐ。

「……お母さんには言わないで…か。」

何が軽いノリだ？お前は乱暴に犯されるのを、『軽いノリ』として受け取るのか。
低く怒っているかのような声色。

「あ、ちが…」

「お前は男というものを、よく分かっていないみたいだな。自分が何をされたか分かっている

のか？」

「……」

怖い…。お義父さんの目が私をとらえて離してくれない。

「ごめん…なさい…」

「……」

お義父さんは眉間に皺をよせたまま、私の額から大きな手を離し…私の身体を支えて起き上がらせた。

「……？」

そしてそのまま軽々と抱きかかえられ、お義父さんの膝の上に座らされた。

「…お義父…さん…？」

「俺が教育してやる。どれだけ危険だったか。」

(中略)

「や…やだ、やめて…っ

ちゃんと…反省するから…」

「もう遅い。」

お母さんには言わないでほしいんだろ？ だったらお義父さんの言うことを、大人しく全部聞きなさい。」

有無を言わせない威圧感とともに下される命令……。その命令の間も私の下着をなぞる指は、止まらない。

「ひ……あ……あ……や……聞くから……あ……指、やめて……っ」

お母さんにはバレたくない。お母さんの心無い言葉に傷つきたくない。だから何度も頷きながらお義父さんの手首を必死で両手で押さえつけた。

だけどその瞬間、お義父さんがフツと鼻で笑った。

「じゃあ聞くが……俺が到着するまでの間にあの男達に何をされた？」
こりこりと動かす指が止まらない……。阻止も出来ない。

（中略）

その隙にお義父さんの指が下着の隙間から中に侵入してくる。

「や……だ……やめて……っ」

「足を閉じようとするな。俺はそれを許可していない。」

内もを押さえる左手がぐつと食い込む。

「っ、ごめん……なさい……」

下着の隙間から滑り込んできたお義父さんの指は、驚くほど太くて、硬かった。それが、まだ誰にも触れられたことのない私の割れ目を直接なぞる。

「ひや……ああ……っ、あ……」

「こんなに濡らして…クリトリスから教育していくか。」

お義父さんの冷酷な宣言…その直後、ごりつとクリトリスの芯を揺さぶるように指が動いた。

「ああああ…っ、や、なに…い…あ…あっ」

熱くて硬い指がコリコリとクリトリスを弾く度に、下半身から脳に突き刺さるような快感が駆け上がってくる。

（中略）

私から離れたお義父さんの低い宣言に、身体がびくつと震えた。手際よく外れていくベルト。中から取り出されたソレは、あまりにも大きくて、どくんどくんと脈打っていて…グロテスクだった。

「や…無理…やだ…っ…」

快感に支配されているといえど…こんなモノが入るはずもなく…恐ろしさで許されていない拒絶をしてしまった。

「……」

静かに冷たく私を見下ろすお義父さんの目…。

「壊れちゃう、そんなの入らないよ…、やめて…」

「…あかり」

普段私の名前を呼ぶ事のないお義父さんが、低く執着に満ち溢れた声色で私の名前を呼ぶ。そ

の声にぎゅつと胸が締め付けられ、声が出なくなつた。

「…っ」

「おいで。」

ソファでだらしなく股を広げて座る私を、お義父さんは軽々と抱きかかえた。

「…お義父…さん…っ」

「ベッドで壊してやる。」

冷酷な破壊宣言…。

（溺愛調教の全容は製品版にて）